



# 思考力や表現力の育成を目指した指導 ～1学年「話す力」を高めるための言語活動と指導の工夫～

なぎさ公園小学校  
教諭 佐々木 彩



## はじめに

1年生国語科の指導を行った平成28年4月からの1年間。おはなしの発表会やなぎさ祭などの様々な行事で、子どもたちが堂々と発表をする姿には、本当に驚かされた。しかし、授業など日常生活の場での、意見交流やグループ活動をする姿には課題を感じていた。そこで、「子どもたち自身は、話すことに自信を持っているのか」ということについて、アンケートを実施した。すると、「みんなの前で、自分が考えたことを発表できる」の項目は、クラスの85%の児童が「当てはまる」と回答したものの、「友だちにわかるように工夫して説明したり発表したりすることができる」の項目では、「当てはまる」と回答した児童が78%の回答にとどまった。このことから、子どもたちの実態として、「みんなの前で発表することに積極的になりつつあ

るが、自信を持つには至っていない」「相手意識を持ってわかりやすく発表することが十分ではない」ことが見出された。「話す力」を付けることは、人のかかわりの中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする「伝え合う力」に繋がり、豊かな人間関係の構築や学力向上の基盤となる能力である。そこで、「話す力」を付けることを目指して、単元を設定した。

## 課題を踏まえた単元の設定

単元名は、「『わたしは、だれでしょう』クイズ大会をしよう」とした。単元のゴールである「『わたしは、だれでしょう』クイズ大会」に向けて、子どもたちは、身近にある物の特徴を活かしてクイズを作る。一人ひとりが、出題者と回答者のどちらの立場も体験をする中で、当ててほしい物の特徴を順序立てて話すことや、根拠を持って自分の考えた答えを述べたりすることをねらいとする。

低学年特有の、自分のことを話したい、自分でやってみたいという意欲を大切にしつつ、視点を自分から友だちや周囲の人に向ける活動を設定した。特に、クイズを作るとき、ヒントの順番が大切だと気付かせるよう意識して取組ませた。

## 指導上の工夫

### ①クイズのモデルを示す

この単元の導入では、子どもたちをひきつける必要があるため、まず子どもたちにクイズを出すところから始めた。そうすると、どんな活動をするのか

がわかり、「クイズって楽しい!」「早く自分のクイズが作りたいな」「ほくにもできそう!」と子どもの意欲に繋がる。クイズの答えは、「教室にある物」に範囲を絞り、全員が共通にわかりやすい答えを用意できるようにした。また、クイズの答えは「ひみつのこたえ」と呼ぶことにした。

## クイズのモデル

わたしは、ながぼそいです。  
わたしは、木でできています。  
わたしは、字をかくのが大きいです。  
わたしは、だれでしょう。  
ひみつのこたえ(えんぴつ)

### ②「とっておきのヒント」の設定

クイズとはいえ、相手に答えを当ててもらえるように工夫をしなければならない。

まず、ヒントを考える際に、「どのような言葉が特徴を表すのか」を示す必要があると考えた。既習事項の「5W1H」や五感を表す言葉と繋げられるように、「とくちょうをかんがえるコツ」としてワークシートに載せた。



ワークシートでの手立て

また、考えたヒントの中から一つだけ「とっておきのヒント」を選ぶことにした。(クイズのモデルでいうと、「わたしは、字をかくのが大きいです」がとっておきのヒントになる。)ヒントの順番を考

える際に、「これを言えばきっとわかる」というものを最後にすると、だんだん答えに近づいていけるクイズになるということを順番を選ぶ手立てとした。

### ③グループ活動の充実

クイズ大会は、出題者と回答者のお互いが、やり取りをする間に正解にたどり着くことが大切である。出題と応答の繰り返しを通して、コミュニケーションの楽しさを感じ取らせていく。そのため、クイズを作る際にアドバイスをし合うことや、本番のクイズの出し合いでは、グループでの活動を取入れた。



アドバイスをし合う

## 指導の実際

子どもたちは、クイズを作ることに意欲的で、「ひみつのこたえ」の特徴をたくさん考えていた。ヒントの順を考える際、子どもたちは「だんだんわかるように」というところが難しかったようである。しかし、

そのような時は、友だちからアドバイスをもらうグループ活動が役に立った。「とっておきのヒントはこれがいいんじゃない?」「ヒントの順番を替えてみたら?」と、友だちと意見をやり取りしていた。

クイズ大会本番では、なかなか授業中に発言をできない子も、笑顔でクイズを発表する姿が見られた。出題者が、ノートやマイクを持つのを助ける姿も見られた。班で答えを一つに絞るときに、多少盛り上がりが過ぎてしまう場面もあったが、体を友だちのほうに向けて、意見をまとめようとしていた。



相手に体を向けて話合う

アンケート結果	10月	2月
①楽しくクイズ大会ができた	—	97%
②ヒントや順番が相手にわかりやすそうだった	—	97%
③みんなの前で、自分が考えたことを発表できる	85%	93%
④友だちにわかるように工夫して説明したり発表したりすることができる	78%	90%

単元の前後でのアンケートの比較

## 子どもの振り返り

子どもたちは、話す相手を意識した振り返りを書いていた。

あいての人にはなまるをもらったから、じぶんのことばやこえが上手に言えたと思いました。また、クイズ大かいたいです。

〇〇くんのクイズがおもしろかったです。こたえは、ランドセルで、ザラザラというヒントを言っていたのが、よく見ているなどおもいました。

さいごまで、「うーん」「なにかない…」などとなってきていて、うれしかったです。おとうさんとおかあさんにもクイズを出そうかな。

## おわりに

この単元の学習が終わった後、再度アンケートを実施した。すると、「みんなの前で、自分が考えたことを発表できる」の項目が、85%から93%に向上していた。そして、「友だちにわかるように工夫して説明したり発表したりすることができる」の項目でも、78%から90%に増加した。この結果から、子どもたちが意欲的に取組める言語活動を設定することや、そのために必要な手立てを講じることで、子どもたちは、楽しんで力を付けていけることがわかった。子ども自身が主体的に思考したり判断したり、表現したりしていけるよう、「聞く力」とも関連付けながら、日々、子どもたちの実態の中から課題を見出し、指導の工夫を積重ねていきたい。



教室に掲示した学習の流れ